

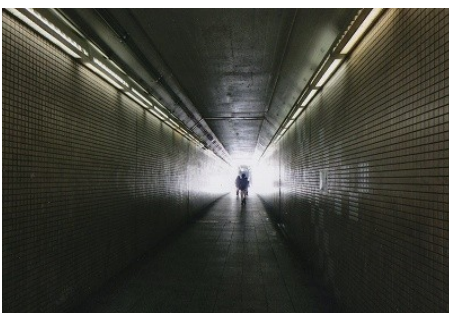
私の住んでいる廿日市市も、広島市郊外のベッドタウンとして宅地化が進んでいます。私のビニールハウスの近くにも、新しい道路が出来、来春には新しい家が11件も建つと聞いています。先日ワンちゃんの散歩で、その場所を通りましたが、これから家が建つ所は雑草が生い茂っていました。その時、そこに一本だけ、秋桜(コスモス)が咲いているのを見つけたんですよ。誰に見られるでもなく、荒れた草地の中で、ピンクの花が風に揺らいでいました。来年は、この場所に家が建ちますから、此处でこの花を見ることはもうないでしょうね。



凜(りん)として 荒れ野に一本 秋桜が

先月の9月19日をもって、65歳になりました。特に感慨はありませんが、役所的な分類としては、私は「高齢者」ということになりますね。そのような年寄り扱いの呼称には不快感しかありませんし、まだまだ人生はこれからだ、と思っています。同世代のほとんどの人はそうではないですか。もちろん不幸にして、重い病に侵された場合は話は違ってきますね。そういえば、市役所から介護保険証なるものを送付してきて、保険料を振り込むように請求されましたね。「わたしは介護されてまで生きとうないんで、そんなもの払いとうないわい」と言ってやりたいのですが、人生これからどうなるかわからないですからね。やっぱり、銀行へ行って振り込んでおきましたよ。死と真剣に向き合うまではいきませんが、自分の人生の終末を、自然に意識し始める年齢となったということでしょう。

最近私にとって一番ショックだったのは、妻が入院、手術をしたことです。病名は「乳がん」、正確には「浸潤性乳管癌」(しんじゅんせいにようかんだん)という病です。7月の会社の健康診断で「肺に影が映っているので要精検」という程度でした。念の為、専門病院で「造影 CT 検査」を受けたら、思いがけない結果が出てきたのです。突然の「ガン宣告」です。8月初めに発覚し、9月初めには入院即手術となりました。迅速な対応が功を奏し、結果的には2週間で無事に退院することが出来ました。



幸いにもリンパ節への転移もなく、現在はホルモン治療のみで、以前にもまして「元気オバサン」となって、復帰してくれました。これを「不幸中の幸い」というのでしょうか。一時は「妻が私より先に逝く」という、今まで考えてもいなかった「人生のシナリオ」を想像しましたね。それにしても、統計的には日本人の半数がガンになり、さらに4人に一人は認知症になるといいますね。この年になったら、常に「死につながる病」を覚悟して生きなきゃいけないのでしょうか。そうは言っても、「何が

起こっても、自分だけは大丈夫」という「根拠のない楽天性」をもたんと、人間はいきて生きてゆけんですよ。

妻が退院してまもなく、今度は私の歩行にトラブルが生じました。最初は左脚の脹脛に張りを感じる程度だったのです。そのうち左膝に痛みを感じるようになって、歩くことが辛くなりました。腰痛の時に世話になる針灸院に行ったのですが、3回行っても回復せず、「一度整形で調べてもらったらどうですか」と言われ、病院を紹介されました。その時期がイチゴ苗の定植にあたり、どうしても脚を休ませることができませんでした。今にして思うに、連日無理をして仕事をしたことが、悪い状態になる原因になったようです。手術退院したばかりの妻と、89歳になる母の手助けもあって、なんとか今年のイチゴ栽培の危機を乗り切ることができました。



整形外科に行くと、すぐにレントゲンを撮られ、言われたことは「膝が変形しとるね。年のわりに早い、何かスポーツとか仕事で無理をしとらんですか?」。長い市場生活と定年後の農業で、思い当たる節は、沢山ありましたね。「薬を一日3回1週間飲んで、それで楽にならんかったら、注射をしましょうか」ということでした。痛み止めの薬は、飲んだ後はいいのですが、少し経つと痛みが戻るのです。それで1週間後に注射をしてもらいましたよ。「痛み止め」というより、膝の「潤滑油」の効果がある、とのことでしたが、傷みがやわらいだ感じにはなりませんでしたね。

帰省してきた理学療法士をやっている息子に診てもらおうと、「変形性膝関節症」などという有難くない病名を付けてくれました。「あえて言えばランナー膝というやつやな。ゆっくりと、無理せんで、気長に脚のストレッチをせな、治らへんで」というのです。発症から一か月余り、かなり回復しているもの、10月20日現在、いまだに歩行の時に膝に違和感があり、完治とは言えない状態です。

まだまだ若いと思っけていても、それは気持ちばかりで体の現実はかなり情けない状態になっていますね。TVの連ドラのセリフが聞き取りにくいので、耳鼻科に行って検査したら、「加齢による難聴ですね」と言われてガックリ。歯は昔から悪いのですが、歯槽膿漏が進行して「部分入れ歯」を使用。年の割にいい方だと思っていた目の方も、新聞を読むのが辛いので検査をしてもらおうと、「老眼だけでなく乱視も進んでいますね」という診断。あとは持病の「不整脈」も月一で診察を受けなくてははいけないし、アッチの方はまるで元気がないし……。まさに「使い古しのポンコツ車」状態。「財布の中、増えてゆくのは 診察券」というのが、今の私の体の正直なところなのです。



自らの「老い」を、気持ちだけは認めたくない私ですが、一度だけ電車で席を譲られたことがあります。それは数年前、韓国に行った時(コラム4:韓国の旅 参照)の出来事でした。地下鉄で吊革につかまっていると、私の前の女生徒が立ち上がって、何事か言ったのです。私が事態が理解できず立ったまましていると、隣の息子が「席を譲ってくれたみたいよ。座ったら」というのです。仕方なく座りましたが、うれしいというより、「戸惑い」を感じましたね。後で知ったことですが、韓国では「年上の人を敬う」という儒教の価値観が生きているので、若い人が電車の中でお年寄りに席を譲るというのは当たり前のことのようにです。そして「あの女生徒」は私を席を譲るべき「老人」と判断したということでしょう。

それにしても、冒頭でも述べたように65歳になると「高齢者」、75歳になると「後期高齢者」という呼び方は何とかならんもんですかね。いかにも官僚的な「上から目線」の分類で、冷たい呼び方だと感じませんか? 昔の人の年齢の表現には味わいがありましたよ。たとえば、喜寿(きじゅ 77歳)とか傘寿(さんじゅ 80歳)、さらには米寿(べいじゅ 88歳)といった言葉表現はすばらしいですよ。

この言葉を使って、75歳以上を「喜寿世代」、といった使い方はどうですかね。年寄りを尊敬している気持ち、「敬老精神」を感じないですか？

それがダメなら、武士の位にならって、65歳以上は「大名」、75歳以上を「老中」、85歳になったら「大老」、というのはどうですかね。「わしはまだ大名じゃが、あの人はとうとう大老の仲間いりをしたげな」なんていうのは、尊敬されているようでいいじゃないですか。95歳以上は何と呼ぶかですか？それは当然「将軍」ですよ。其の年になっても、人の手を頼ることなく元気でやっている人には、十分に価値ある呼称だと思いますね。

「わしはこの世に生まれて65年、こいつはまだ6か月じゃ。この年になったらいつ迎えが来ても文句は言えんが、こいつとは ちいどでも長ういっしょに暮らしたいもんよ」

